KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

Othello における Robert Armin の役柄

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2022-03-11 キーワード (Ja): Shakespeare, Othello, Robert Armin, Clown, Actor キーワード (En): 作成者: スミザース, 理恵 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00008021

関西外国語大学 研究論集 第115号（2022年 3 月）
Journal of Inquiry and Research, No.115（March 2022）

Othello における Robert Armin の役柄

スミザース理恵

要　旨

1604年の *Othello* 初演当時、道化役者 Robert Armin が演じていた役柄は Iago と Clown のどちらかであるとして、これまで議論が交わされながらも確定には至っていない。両役は、ほぼ同時に舞台に登場するため、Armin がこれら二役を同時に演じていたと考えることは不可能である。1599年に宮内大臣一座に入団した Armin は、道化役者と作家の二つのキャリアを積んでおり、既に観客にはよく知られた存在であったと考えられる。Shakespeare と同様に役者と作家の二足の草鞋を履き、劇団の株も所有していた彼の存在は、劇団にとって非常に重要であったはずである。本稿では、Armin 自身による著作と Shakespeare 劇で彼が演じた役の台詞を分析しながら、当時の演劇界や劇団における Armin の役割を考察する。また、Armin が Iago を演じたとする説と、Clown であったとする説のそれぞれの根拠を再検証し、Armin が *Othello* において演じた役柄とその重要性を明らかにする。

キーワード：Shakespeare、*Othello*、Robert Armin、Clown、Actor

序

1599年に宮内大臣一座（The Chamberlain's Men）に入団した道化役者 Robert Armin が Shakespeare 劇の中で演じた役割については、*As You Like It*（1599）の Touchstone や *Twelfth Night*（1601）の Feste など確定されている役があるものの、多くはまだ確定に至るほどの証拠がない。*Othello* での Armin の役どころについても未だ確定できていない。1604年の初演当時、確実に国王一座（The King's Men）に役者として所属した Armin の役どころは、Iago とする説と、Clown だとする説がある。*Oxford Dictionary of National Biography*（2004）や Edwin Nungezer による *A Dictionary of Actors and Other Persons Associated with the Public Representation of Plays in England before 1642*（1929）では、*Othello* での Armin の役柄についての言及はない。彼が *Othello* で演じた役は、これまではっきりと断定されていないのである。

Othello の上演記録として残されているものは、ジェイムズ一世の御前で上演された1604年のホワイトホール宮殿での最初の記録、次に1610年 4 月のグローブ座でのもの、そして、1610

年9月のOxfordでの三つである。*Othello*が上演されていた1604年から1610年に、Richard Burbageが主役のOthelloを演じていたことは1619年に彼に捧げられた哀歌から明らかである。

> But let me not forget one chiefest part
> Wherein, beyond the rest, he move'd the heart,
> The grievèd Moor, made jealous by a slave,
> Who sent his wife to fill a timeless grave,
> Then slew himself upon the bloody bed.
> All these and many more with him are dead. [1)]

このように、Othelloを演じていたのがBurbageであったことを明らかに示す記録は残っているが、Othelloよりも台詞の多いIagoを演じた役者を示す資料は見当たらない。F. W. Sternfeldは、Iagoを演じたのはArminであったとしている。[2)] またその説を後押しするようなIago分析で、Gary Schmidgallは、IagoがArminの演じた道化役の特徴と類似していることを指摘している。[3)] 一方、John H. AstingtonはIagoを演じた役者については、Joseph Taylorの名前のみをあげている。[4)] Arminが宮内大臣一座に入団し、国王一座で役者として活躍したのは1599年から1610年頃と考えられているが、TaylorはArminよりも18歳ほど若い役者で、1610年頃から役者の道に入ったとされている。*Othello*が1604年には上演されていたことや、Taylorの年齢が当時まだ18歳であったことから考え、初演時のIagoを演じていたのはArminであった可能性の方が、Taylorに比べれば高いと言える。さらに、Sternfeldが説く、ArminがIagoを演じていたという論は、当時の劇団の役者や上演の事情を考慮に入れたものではある。それは、劇団で最も優れた大人の歌手がArminであり、劇中の二曲の歌をIagoとしてArminが歌ったという仮説である。さらにOxfordで*Othello*が上演された1610年に、同じくOxfordでBen Johnsonの*Alchemist*も上演されており、出版された*Alchemist*の台本の役者リストにArminの名前が載っていたということも指摘している。また、Iagoの鋭い皮肉なユーモアが*Twelfth Night*のFesteのセリフに読み取れる道化哲学と共通することも挙げている。[5)] Iagoを演じていたのがArminであったとする説は、ある程度の根拠に基づいており、妥当なようにも思われる。しかし、これらの証拠は確固としたものとは言えない。なぜなら、一つ目の論拠となっているJohnsonの*Alchemist*は同年1610年にBlackfriarsでも上演されており、*Alchemist*にArminが出演していたことが、ArminがIagoを演じたとする直接的な根拠とすることはできないからである。さらに、歌を歌う役が必ずArminによって演じられたと考えることは、Shakespeare劇での歌の多様性と数を考えれば不可能である。Schmidgallが指摘するIagoのせりふに読み取れる道化哲学については、多くの登場人物が共有する普遍的

な考えとしてあらゆる場面で用いられるものである。Armin が Iago を演じていたという説に対立する形で、道化研究者の David Wiles や Catherine A Henze は、Armin が演じていたのは、3 幕 1 場に登場する Clown であったと断言している。

これらの対立する論がどちらも正しいと考えること、つまり Armin が Iago と Clown の両方を演じていた可能性は、Clown と Iago がほぼ同時か、入れ違いで舞台に登場する 3 幕 1 場が存在する限りあり得ないのである。本論では、Armin の役者と作家という二つのキャリアの軌跡を辿り、批評家の間で意見が分かれている *Othello* 初演当時の Armin の役柄について再検証し、Armin が *Othello* 初演時に演じた役割を明らかにする。

1．音楽と言葉の観点から

1599年に Touchstone を演じて以降、*Twelfth Nigh* の Feste や *King Lear* の Fool など、台詞の多い重要な役柄を演じてきた Armin が、Iago を演じたと考えることは不自然ではない。Iago のキャラクター分析をする批評家は、彼の台詞回しに着目し、彼が道化的であることを指摘している。[6] Touchstone や、Feste、Lear の道化、*Troilus and Cressida*（1602）の Thersites、*The Winter's Tale*（1609-11）の Autolycus などが、Armin によって演じられていたと考えられている。[7] これらの道化と同様に、言葉を操り、駄洒落を使い、卑猥な表現を使って人をこきおろすような性質は、確かに Iago にも当てはまる。しかし、道化的性質は Shakespeare 劇では万人に見られる性質として描かれているところもあり、Armin が Iago を演じた根拠とするのは難しい。*Othello* で、どの役を演じていたのかという疑問を解き明かすために、批評家達は二つの点に注目して分析している。一つ目は、*Othello* で使われている音楽、二つ目は道化的な言葉遊びである。この二つの観点から Armin が Iago と Clown のどちらを演じていたのかを考察していく。

Sternfeld が、Armin が Iago を演じていたとする根拠は、Iago が歌う二曲の歌である。彼は、Armin の名とともに、1603年頃に国王一座に加わったと考えられている John Lowin の名も一緒に挙げている。Lowin は Armin の前任の道化役者 William Kemp の宮内大臣一座退団後、Falstaff を演じていた役者で、Parolles (*All's Well That Ends Well,* 1604) や Jonson 作の *Volpone*（初演1605年）の Volpone 役、Alchemist（初演1610年）の Mammon 役など、コミカルな役を演じていたとされている。しかし、Sternfeld は歌を得意とした Armin が、劇中二曲の歌を歌う Iago を演じたと考える妥当性を主張している。[8] *Othello* で歌われる歌は Iago が歌う“And Let Me the Canakin Clink”（2. 3）、“King Stephen”（2. 3）、Desdemona が歌う“Willow, Willow”（4. 3）と、Emilia による“Willow”（5. 2）がある。劇中最も有名な“Willow song”を歌うのは Desdemona であり、歌を歌う登場人物が必ずしも Armin によって演じら

れたというのは根拠とならないことは明白だ。また、Iago の歌う二曲は当時よく知られたスコットランドのバラッドであるが、Armin の歌う歌は場面に合うように改作されていたということを、Henze は Armin の歌の特徴として指摘している。[9] さらに、他作品における Armin の歌は途中で他の登場人物の台詞や登場によって遮られるという特徴を持っているが、Iago の歌は最後まで歌われるのである。Henze は Desdemona と Ophelia の歌の共通点をあげながら、この二人の女役が Armin の徒弟によって演じられていた可能性を指摘している。その主張は、Armin の金細工師としてのキャリアを起点としている。Henze によれば、Armin は、1581年10月、13歳の頃に金細工師の John Lonyson の弟子となり、翌年 Lonyson が死去したため、1582年 9 月29日（ミカエル祭）から John Kettlewood に 9 年間徒弟として仕えていた。Armin は宮内大臣一座に入団する前には徒弟の期間をつとめ上げており、役者としてのキャリアを本格的にスタートした頃には、Armin 自身が正式に弟子を持つことは可能であったということである。役者業にはギルド制度が無かったため、金細工師としてではあるが、ギルドメンバーであった Armin が劇団内で弟子を持っていた可能性は高いと Henze は分析している。Armin は1604年 1 月27日に金細工師のフリーマンとなり、1608年 7 月15日に少なくとも一人の弟子をとっている。[10] Armin が劇団内で弟子を持ち、歌や道化の台詞回しなどを教えていた可能性は大いにあり得ることである。しかしながら、記録に残っているこの 1 人の弟子が本当に劇団内で仕えた弟子であったのかという証拠は残っていない。

確実に言えることは、1599年以降に Armin が宮内大臣一座に入団してから後、Shakespeare 戯曲に使われた歌の数は倍以上に増えているということである。Henze が “Countertenor”[11] であったと分析するほど、抜きんでて歌が得意であったと考えられている Armin が、Shakespeare の作劇に影響を及ぼしていることは間違いない。しかし、これらの歌は Armin が演じた役によってのみ歌われているわけでないことにも注意しなければならない。Ophelia や Desdemona 以外にも、Armin が演じていない歌を歌う登場人物は何人かいる。例えば *Troilus and Cressida* の 3 幕 1 場における Pandarus の歌、*As You Like It* の森の住民が歌う歌“What Shall He Have”（4.2.10-19）、*Twelfth Night* 2 幕 3 場では Feste と一緒に Sir Toby や Andrew などが歌を歌う役であり、Armin によって演じられていない。Henze は Armin が劇団内で弟子を持っていた可能性に加え、Shakespeare の共著者であった可能性までも主張し、当時の劇団における Armin の存在の重要性を強調している。[12] 当時の徒弟制度の重要性、Armin の突出した歌の才能と、劇中使用される歌の数の顕著な増加から考え、Henze の仮説が事実であった可能性は高いと言える。更に、Nora Johnson は、Armin の作家としての力は、彼の演技力と、道化役者としてのカリスマ性と相まって、Armin が作劇の発展のために劇団内で影響力のある人物であったことを示していると指摘している。[13]

もともと Armin は役者としてではなく作家として、パンフレットや宗教書の序文なども出

版もしており、1590年にはある程度の名声も得ていた。しかし、1600年の自身の著書 *Foole Vpon Foole* では、Armin は著者名を「カーテン座の Snuff」としている。更に、1608年に改作として上梓した *A Nest of Ninnies* の著者名は「グローブ座の Snuff」と改められている。つまり、彼が役者活動の拠点となる劇場を表紙に記し始め、役者としてのアイデンティティを軸としながら、執筆活動を行ない始めたと考えることができる。Wiles は、Armin が役者として1600年、1603年、1605年、1608年、1609年、1610年の届出に継続して宮内大臣一座や国王一座との契約が記録されていることから、ペストで劇場が閉鎖されている間に Armin が集中的に執筆活動を行なっていた可能性も言及している。[14] Armin は、宗教書 *A Briefe Resolution of a Right Religion*（1590）の序文の推薦文を出版し、その後 *Foole Vpon Foole*（1600）、*Quips upon Questions*（1600）、*Nest of Ninnies*（1608）、*The Italian Tailor and his Boy*（1609）, *Two Maids of More-clacke*（1609）を発表している。1610年から1614年に出版された、*The Valiant Welshman* については、Armin によるものであったと考えられつつあるものの、現在も作者については議論中の作品である。役者としての記録とこれらの作品の出版年を照合しても、Armin が作家業と役者業を並行して行っていたことは明らかである。

Shakespeare と同様、作家と役者を兼業した Armin は、相互の経験を融合させながら二つのキャリアを積んでいたのである。彼の残した作品は、彼が演じた役を分析し、断定する上で非常に重要であると言える。しかし、Armin の著書は不可解で独特の言葉遣いが特徴的であることから、研究者を悩ませている。Alexander S Liddie は Armin の *The Two Maids of More-clack* の文体を分析し、その特徴を列挙している。造語（neologisms）や、故意ではない誤用語（unintentional malapropisms）、テキストの破損（textual corruption）、換喩（metonymy）、そして単語の従来の意味を曲げ特異な意味で用いられる語などである。例えば、作中22回も使われる“challenge”という語は「競争を挑む」「論争する」「当然だと要求する」「必要とする」「求める」などといった様々な意味で用いられる。他にも独特の言い回しや表現が多く、Armin 作品は現在も研究の過程にある。[15] これらの造語や意味の転用などによる言葉遊びは、Nora Johnson も指摘している通り、舞台の上での話し言葉として書かれているために起こるものであると考えることもできる。[16] スペルや言葉の用い方が一般的ではなく、特殊な語彙や表現の使い方のせいで文章も理解しにくく、当時から現在にかけ、作家としての評価は高くない。それは、彼の作品を一読すれば納得ができることである。しかし、彼の文体の特異性のようなものは、Shakespeare 作品にも見うけることができ、彼の文体の特徴は役者リストが現存しない場合に、Armin の役柄を特定する重要な手がかりとなる。ここからは、Armin の役者兼作家としての特徴を捉えた上で、*Othello* の登場人物の台詞を読み直し、Armin が Iago を演じた可能性と、Armin が Clown を演じた可能性について検証していく。

2．Iago か Clown か

Armin が *Othello* 初演当初に Iago を演じたのか、或いは Clown を演じたのかという問題は、Iago と Clown の台詞に残された Armin らしさの発見により分析的に検証できるのではないだろうか。Iago は幕開けから舞台に登場し、劇の最後まで舞台に残る。彼の台詞は、主役の Othello よりも長く、観客に向かって Othello に対する陰謀や、陰謀の動機らしき内心を打ち明けることから、Iago の存在は Othello 以上に、観客に近く感じられる。劇中何度も“devil”と呼ばれる Iago は、道化の原型であった道徳劇の Vice のような存在であり、確かに Armin が言いそうな道化的な台詞も多く用いている。Othello に“cuckold”（3.3.169）になってしまう恐怖を植えつけ、結婚した男は頸木がかけられ重荷を負わされる（4.1.66-67）という話題を持ち出し、当時の常套表現を用いて妻の不貞や結婚を揶揄する台詞は、Armin が演じたと考えられている Thersites や Touchstone と共通するものである。 また、Iago は道化のように言葉の二面性を捉えて Othello を操っていく。4 幕 1 場では“lie”の意味を転換し、性的なイメージを増殖させ、Othello の嫉妬を触発する。

IAGO. Lie.
OTHELLO. With her?
IAGO. With her, on her, what you will.
OTHELLO. Lie with her? Lie on her? We say lie on her
when they belie her! Lie with her, zounds, that's
fulsome!— Handkerchief! confessions! handkerchief!（4.1.34-7）

“lie”の意味の転換は、Touchstone の台詞“Upon a lie seven times removed.”（5. 4. 67）の台詞を想起させるが、この箇所では、“lie”の意味を転換しているは Iago ではなく Othello であることは注目に値する。つまり、Iago は自らが言葉の意味を曲げていくのではなく、そのきっかけを巧みに Othello に与え、操っているだけなのである。Armin が演じた Feste は自らを“corrupter/ of words”（3. 1. 34-35）と呼び、“A sentence is but a chev'rel glove to a good wit, how quickly the wrong side may be turned outward.”（3.1.11-12）と述べている。もしも Armin が Iago を演じていたのであれば、彼は Othello に“lie”の意味の転用をさせるのではなく、自らが巧みな話術を披露し、冗談にしてしまうにちがいない。Armin が確実に演じたとされる Touchstone は、似たような言葉遊びを展開している。Touchstone（Armin）は“bear”の意味を転じた冗談で会話を進める。

CELIA. I pray you bear with me. I cannot go no further.
TOUCHSTONE. For my part, I had rather bear with you than
bear you; yet I should bear no cross if I did bear
you, for I think you have no money in your purse. (*As You Like It*, 2.4.8-11)

Celia が「我慢して待ってほしい」[17] と言うと、Touchstone が「君を運ぶくらいなら我慢するよ」と返し「君を運んでも、cross を運べない、もらえない」と続け、「我慢する」と「運ぶ」「持つ」という意味を“bear”から引き出しながら言葉遊びを展開していく。ここでの“cross”はキリストの運ぶ十字架の意味と、当時のコインに描かれた十字の模様を同時に連想させ、「お金にならない」という結びとなる。Armin は、言葉の多義性を引き出しながら、多様で複雑なイメージを生み出し、主要登場人物と直接関わりながら劇に溶け込む道化を演じていたことが分かる。Touchstone の台詞では、Iago と Othello の“lie”の意味の転換による冗談よりも、複雑にイメージが変化して会話が展開していることが読み取れる。この Touchstone の台詞は、Iago や Othello の会話よりも、むしろ Clown と Desdemona の会話に共通するものである。

DESDEMONA. Do you know, sirrah, where Lieutenant
Cassio lies?
CLWON. I dare not say he lies anywhere.
DESDEMONA. Why, man?
CLWON. He's a soldier, and for one to say a soldier lies, 'tis stabbing.
DESDEMONA. Go to. Where lodges he?
CLWON. To tell you where he lodges is to tell you
where I lie.
DESDEMONA. Can anything be made of this?
CLOWN. I know not where he lodges, and for me to
devise a lodging and say he lies here, or he lies there,
were to lie in mine own throat.
DESDEMONA. Can you inquire him out and be edified by report?
CLWON. I will catechize the world for him, that is, make
questions, and by them answer.
DESDEMONA. Seek him, bid him come hither. Tell him I
have moved my lord on his behalf, and hope all will
be well.

CLWON. To do this is within the compass of man's wit,
and therefore I will attempt the doing it. *Exit.*（3.4.1-22）

ここで、偶然かも知れないが合計で7回使われる“lie”は、まさにTouchstoneの道化話術“Upon a lie seven times removed.”（5. 4.67）の完成形として読むこともできる。「滞在する」「寝る」「嘘をつく」と“lie”の意味が変化して会話が進み、その後は教理問答を連想させる“inquire”や“catechize”という語で宗教的な語彙へと導いていく。“catechize”（1.5.57）という語は*Twelfth Night*でもFesteがOliviaとの会話の中で「問い正す」という意味で用いており、彼は“edified”（5.1.284）もこの部分と同様に“informed”の意味で用いられている。さらに、“inquire”は*Foole Vpon Foole*で、“catechize”は、*Two Maids of More-clack*の中でも用いられている語彙である。Armin作品の中に見られる特徴的な言葉遣いは、*Othello*のClownの台詞にも読み取ることができるのである。また、宗教的な単語を用いていることも、信仰心が強く、宗教書の序文を執筆したArminらしい言葉遣いであると言える。*Two Maids of More-clack*においても、「嘘」という意味で“lie”ではなく“Pagan”という語をわざわざ用いている箇所がある。単純な意味を示す語に独特の語彙を用いて表現する作家Arminの特徴はClownの台詞に見ることができるのである。

もう一つのClown登場場面、3幕1場では、単語の多義性を利用しながら冗談を言うArminの特徴が更に顕著に表れている。

CLOWN. Why, masters, have your instruments been in
Naples, that they speak i'th' nose thus?
1 MUSICIAN. How sir? How?
CLOWN. Are these, I pray you, wind instruments?
1 MUSICIAN. Ay, marry, are they, sir.
CLOWN. Oh, thereby hangs a tail.
1 MUSICIAN. Whereby hangs a tail, sir?
CLOWN. Marry sir, by many a wind instrument that I know. But, masters, here's money for you, and the general so likes your music that he desires you, for love's sake, to make no more noise with it.
1 MUSICIAN. Well, sir, we will not.
CLOWN. If you have any music that may not be heard,
to't again. But as they say, to hear music the general
does not greatly care.

1 MUSICIAN. We have none such, sir.
CLOWN. Then put up your pipes in your bag, for I'll
away. Go, vanish into air, away! (3.1.3-20)

ここで Clown が言う“wind instruments”はバグパイプのことだが、その音が鼻にかかったような音であることからナポリ人の鼻にかかったような発音についても言及している。同時に、ナポリが当時売春で有名であったこととかけ、梅毒で鼻がそげることに話題を変えていく対話の流れである。そのイメージから“wind”の意味を転換し、“tail”へと繋げ、卑猥なイメージを用いながらも、同音異義語“tale”が使われていた当時のことわざ“There by hangs a tale”[18] を導くのである。Touchstone や Feste のように言葉の多義性を利用した言葉遊びは、まさに Armin の得意とするところである。Armin は自身の作品において“tale”「話」と“tail”「尾」の言葉遊びを使ってはいないが、この二つのスペルを区別することなく「話」と言う意味で混在させて使用している。Liddie は Armin の文章を分析し、彼の綴りが一貫しておらず、主に演じることを考えて書かれていると指摘している。[19] 彼のスペルの流動性は、視覚よりも聴覚に敏感な音楽家としての Armin の資質をも示しており、巧みな言葉遊びを可能とする彼の才能として解釈することもできる。

もう一つ、注目に値することは、Armin に役者として与えられた台詞はどの作品においても、全てが散文体であるということである。Touchstone や Feste の台詞ももちろん散文である。身分の高い Rosalind や Celia が Touchstone と話す時は、彼女たちが Feste（Armin）に合わせてわざわざ散文体に変えて話すという場面さえもある。Clown が一貫して散文で話すのに対して、Iago は韻文で話し、Othello と行を分け合う Stichomythia で緊迫した場面を展開する台詞は特に印象的である。これは、Armin の演じた他の道化の台詞には見られない特徴である。このように、文体や単語の用い方、冗談の展開方法などを分析していくと、Armin らしさは、Iago ではなく、Clown の台詞に圧倒的に多く読み取ることができ、Armin が Clown を演じていたと考えることが自然であると考えられる。

Othello における Armin 登場の効果

3 幕 1 場での Clown は、音楽家達が楽器を奏でている最中に突然登場し、音楽を止め、音楽家達を追い払うという役割を担っている。*Othello* には音楽用語が随所で駆使されており、作品にとって音楽は重要な要素であることは明白である。それ故、その音楽を止めるという Clown の行為は非常に象徴的であり、重要な意味を持っているのである。劇で奏でられるハーモニーが突然止められ、将軍 Othello は音楽には関心がないから舞台から出ていくようにと Clown は音楽家たちに指示する。先に引用したこの Clown と音楽家の会話では、Clown は

“music”と“noise”の二つの語を用いて「音楽」を指している。“noise”は*OED* 5aの用例によれば、1366年から1798年にかけて“An agreeable and melodious sound”と言う意味で用いられており、現在の雑音や騒音といった意味よりも主に大きな音を表す語で、時に“music”と同じ意味を持っていた言葉であったことが分かる。2幕1場で、OthelloがDesdemonaとキスを交わし、その音が最大の不協和音“discords”（2.1.196）であるようにと願う場面では、“noise”ではなく“discords”が用いられている。

> Othello. And this, and this the greatest discords be *They kiss.*
> That e'er our hearts shall make.
> Iago. [aside] O, you are well tuned now: but I'll set down
> The pegs that make this music, as honest
> As I am. (2.1.196-200)

IagoはOthelloの台詞から音楽の隠喩を読み取り、弦楽器の糸巻き部分である“peg”を緩めてOthelloとDesdemonaの奏でる“tune”を乱そうとする。Clownが登場する3幕1場短い場面は、OthelloとDesdemonaの奏でるハーモニーがIagoの策略により狂い始める、悲劇のプロットの幕開けを表現しているのである。“any music that may not be heard”（3.1.15）という台詞で表現される通り、最高のハーモニーであるはずの天上の音楽は劇世界から消え、宇宙の均衡が失われたことが示されるのである。単なるコミックリリーフとして、カットされることも多いClown登場場面であるが、この場面は劇の主筋とは切り離された伝統的な幕間劇の役割を持ちつつも、*Hamlet*の3幕3場の道化論で示される“some necessary ques-/tion of the play”（*Hamlet*, 3.2.42-43）を考慮してShakespeareが創り出した場面であるということが分かる。「均衡を失った音楽の無い悲劇的世界」という劇の一つの主題を凝縮して象徴するこの場面が、作品にとって重要な意味を持った場面であることは間違いない。

*Othello*のClownには、たった28行しか台詞が用意されていない。しかし、自身の活躍した劇場を著書に記すほど、役者としての知名度が高くなっていたArminの舞台への登場は、短い場面であるにも拘らず印象的な場面であったと考えられる。Arminの師匠道化であったと言われるRichard Tarltonには、控室とタペストリーの間から顔を覗かせるだけで観客から大きな笑いが起こり、止まなかったという逸話がHenry Peachamによって残されている。

> Tarlton when his head was onely seene,
> The Tire-house dore and Tapistirie betweene,
> Set all the multitude in such a laughter,

They could not hold for scares an houre after.[20]

死後も伝説化された Tarlton ほどではなかったのかも知れないが、道化として知名度と人気の高かった Armin が登場した時にも、彼の小人のような身体的特徴も手伝って、当時の観客たちは直ちに Armin の登場をはっきりと認識し、反応した可能性は高かったと考えられる。1609年に *The History of the two Maids of More-clacke* が少年劇団によって上演された際に、Armin は“I would have againe inacted John myself, but Tempora mutantur in illis, & I cannot do as I would.”[21] と言うコメントを著書の序章に残している。Nungezer は、この頃に Armin が引退した可能性を示唆しているが、1610年に上演されたと考えられる *Alchemist* の役者リストには Drugger 役として Armin の名前が記されている。台詞も少なく、主要登場人物 Face や Subtle につけ込まれるだけのこの役柄には、Clown の伝統的役割や Touchstone や Feste のような快活さは無く、Armin の道化役者としての翳りが見られる。この時期の Armin の役柄は、Touchstone や Feste を演じていた1600年前後の道化に比べ、登場場面やセリフがずいぶん少ない。Liddie は *The Valiant Welshman* が、作家として腕をあげた Armin の手によって描かれたものであるとし、役者としての活動を休むか減らすかして執筆技法を飛躍的に上達させたという論を展開している。[22] Touchstone（1599年初演）や Feste（1602年初演）、Thersites（1604年初演）、Lear の Fool（1605年初演）は行数も多く、技術と才能を備えた劇団の主要道化役者であった Armin が間違いなく演じたと考えられている。しかし、Armin が演じた可能性があげられている *Hamlet*（1602年初演）の Grave-digger（18行）や *Macbeth*（1606年初演）の Porter（46行）は *Othello* の Clown と同じく出番の少ない役柄である。1604年から1610年頃に上演されていたと考えられる *Othello* でも、何らかの理由で Armin の出番が少なかった可能性も十分に考えられる。Armin と同様に、戯曲を書きながら役者をしていた Shakespeare も1605年の *Volpone* 初演以降、役者としては活動していなかったと考えられている。[23] 執筆に専念するためと考えられるが、Armin についても同じことが言えるのではないだろうか。1616年に出版されている *The Works of Benjamin Jonson* には、*Every Man in his Humor* と *Sejanus* のキャストリストが含まれており、Shakespeare の名前が含まれた二つのリストは、それぞれのリストが“the principal comedians were”、“The principall Tragedians were”で始まっている。[24] 1598年のコメディ役者リストには Armin の前任であった劇団の道化役者 Kemp の名前が記されている。一方、*Sejanus* が上演された1603年に Armin は国王一座に所属していた記録があるものの、リストの中に彼の名前はない。[25] Armin は道化役者としての存在感と知名度から Tragedian としての扱いを受けず、あくまで Comedian として認識されていたと考えられる。

演劇界、出版界で名を馳せた Armin は Shakespeare 同様、キャリア後半において役者とし

ても、作家としても安定した地位を築いていたと考えられる。1610年に John Davies が出版した *Scourge of Folly* で、Armin に向けて書いた詩は次のように始まっている。

> To honest-gamesome Robert Armin,
> That tickles the spleen like an harmless
> vermin. [26)]

Armin の人柄を示していると考えることもできるが、出版された文書だけに、役者として有名であった Armin が演じた役柄を表しているとも解釈できる。“harmless”という形容詞が、Iago のイメージから Armin を遠ざける表現のようにも読むことができる。*Othello* 初演時頃、役者としての地位や技術を確立した Armin は、執筆活動を行いながら、ギルドメンバーとして社会的な責任を持ち、劇団内で歌の指導を行うような立場でもあった。[27)] Shakespeare 同様、劇団の株を所有し、一人の役者以上の重要な責務を劇団内で果たしていたに違いない。しかし、*Othello* においては悲劇を成立させるために、台詞の少ない Clown として舞台に立ち、劇世界のハーモニーの崩壊と真の悲劇の幕開けを宣言する役を演じたのである。喜劇役者 Armin の舞台への出番は、最小限に抑えられながらも、彼の才能や技術が作品や劇団に与えた影響は極めて決定的なものであったと考えられる。Armin の歌の才能や言葉遣い、道化役者としての存在感や知名度、社会的な地位など、さまざまな側面から考え、Armin は当時の演劇界において唯一無二の存在であったと考えられる。登場場面の短い *Othello* の Clown は、初演当時、誰もが知る道化役者 Armin が演じることにより、その登場意義が明確となっていたのであろう。コミックリリーフ以上の意味を Armin の登場により印象づけ、*Othello* の劇中世界における音楽的ハーモニーの崩壊を巧みな話術で告げる Clown 登場場面は、観客の記憶に刻まれたに違いない。

結論

本論では、Armin による著書や他の Shakespeare 作品における Armin の特徴を検証しながら、*Othello* 初演当時に Armin が Iago を演じたとする説と、Clown であったとする説の可能性について考察してきた。Armin 作品や彼の他作品における台詞の語彙や文体レベルでの分析により、Clown の台詞がより色濃く Armin の特徴を反映しているということを読み取ることができた。Armin 作品における言葉遣いや役者としての特徴は、彼が Iago ではなく、Clown を演じていたということを十分に示している。Armin が Iago を演じたとする Sternfeld の説は、当時の劇団内での Armin の歌手としての特質と *Othello* の歌の場面に過剰に注目するあまり、

Armin に関する史料や言語的特徴を十分に考慮し切れておらず、端的に導かれたものであると言える。Armin の特徴を多角的に捉えた上で上演場面を再考することで、Clown のような出番の少ない役柄でも、その演劇的効果と意味が明白となるのである。劇団の主要役者であり、道化役者として既に有名人であった Armin は、その特異な存在感で、短い Clown 登場場面に彼にしか創造することのできない重要性とインパクトを与えていたのである。Armin 演じる Clown は、*Othello* という作品に流れるハーモニーを止め、Othello と Desdemona の間に起こる本当の悲劇の幕開けを告げる重要な役割を担っているのである。

註

1）*Othello*, Introduction, 28.

2）Sternfeld, 175.

3）Schmidgall, 157.

4）Astington, 135.

5）Sternfeld, 175.

6）Robert H. BellはIagoを“an abusive trickster, juggler of words, punster, riddler, and scourge, shrewd, vulgar, and cogent.”(111)と呼び、Iagoを道化の特質に照らして論じている。

7）Van Esは“Shakespeare began in 1600 to write a series of very different characters with an explicitly foolish persona: these included Touchstone, Thersites, Feste, and the Fool in *Lear*. It is near enough certain that all of these roles were crafted specifically for Armin and we can have confidence in the identification of other major parts as well. There is a strong possibility, for example, that the diarist Simon Forman saw him as Autolycus in The Winter's Tale at the Globe in 1611.”(167)とし、これらの役割がArminによってほぼ確実に演じられたことを断言している。

8）Sternfeld, 175.

9）Henze, 32.

10）Henze, 115.

11）Henze, 25.

12）Henze, 174.

13）Johnson, 27.

14）Wiles, 140.

15）Liddie, pp.42-46.

16）Johnsonは“he [Armin] stands as an example of the implications of print and performance for one another, the way in which the two media worked together in early modern England.”(53)と述べ、初期近代における印刷と演劇の密接な関係をArminの作品に見出している。

17）本稿における引用訳は筆者によるものである。

18）Dent, T 48.

19）Liddieは“Whatever stylistic talents Armin possessed, they are not to be understood in linguistic terms but in dramatic ones; his real style can be appreciated only in an examination of his handling of large theatrical modes and conventions, wherein he may be considered worthy of some respect for ingenuity and inventiveness.”(52)とArminの特異な文体を分析している。

20）Gurr, 107.

21）Armin, *The Works of Robert Armin*, 65.

22）Liddie, 10.

23）“The absence of his name from later cast lists may be taken as evidence that Shakespeare ended his career as a player before the first performance of *Volpone* in 1605, presumably so that he could concentrate on his work as a playwright.”“Nelson, Aland H.“The Works of Benjamin Jonson: Shakespeare included in two lists”Shakespearedocumented@folgear.edu, 25Jan. 2020, Folger Shakespeare Library.
https://shakespearedocumented.folger.edu/resource/document/works-benjamin-jonson-shakespeare-included-two-cast-lists

24）Nelson.

25）Nelson.

26）Liddie, 11.

27）Henze, 115.

Works Cited

Armin, Robert. *A Briefe Resolution of a Right Religion*. London: Roger Ward, 1590.

---. *The Works of Robert Armin*. Alexander B. Grosart. Manchester: Charles E. Simms, 1880.

---. *Quips upon Questions, or A Clownes Conceite on Occasion Offered*. London: W. White, 1600.

Astington, H. John. *Actors and Acting in Shakespeare's Time: The Art of Stage Playing*. Cambridge: Cambridge UP, 2010.

Bell, Robert H. *Shakespeare's Great Stage of Fools*. New York: Palgrave Macmillan, 2011.

Dent, Robert William. *Shakespeare's Proverbial Language*. Berkeley: University of California Press, 1981.

Edmondson, Paul. Wells, Stanly. Eds. *The Shakespeare Circle: An Alternative Biography*. Cambridge: Cambridge UP, 2015.

Gurr, Andrew. *The Shakespearean Stage 1574-1642*. 4th ed. Cambridge: Cambridge UP, 2009.

Henze, Catherine A. *Robert Armin and Shakespeare's Performed Songs*. New York: Routledge, 2017.

Johnson, Nora. *The Actor as Playwright in Early Modern Drama*. Cambridge: Cambridge, 2003.

Liddie, Alexander S. *An Old-spelling Critical Edition of the History of the Two Maids of More-clacke*. New York: Routledge, 1979.

Nelson, Aland H. "The Works of Benjamin Jonson: Shakespeare included in two lists" Shakespearedocumented@folgear.edu, 25Jan. 2020, Folger Shakespeare Library. https://shakespearedocumented.folger.edu/resource/document/works-benjamin-jonson-shakespeare-included-two-cast-lists

Nungezer, Edwin. *A Dictionary of Actors and of Other Persons Associated with Public Representation of Plays in England before 1642*. New Heaven: Yale UP, 1929.

Schmidgall, Gray. *Shakespeare and the Poet's Life*. Kentucky: University Press of Kentucky, 1990.

Shakespeare, William. *As You Like It*. Ed. Agnes Latham. (Arden Shakespeare, third series) London: Thomson, 2002.

---. *Hamlet*. Ed. Harold Jenkins. (Arden Shakespeare, third series) London: Thomson, 2003.

---. *Othello*. Ed. E.A.J. Honigmann. (Arden Shakespeare, third series) London: Bloomsbury, 2016.

---. *Twelfth Night*. Ed. Roger Warren and Stanley Wells. (Arden Shakespeare, third series) New York: Oxford UP, 1994.

Sternfeld, F W. *Music in Shakespearean Tragedy*. London: Routledge, 1963.

Van Es, Bart. *Shakespeare in Company*. New York: Oxford UP, 2013.

Wiles, David. *Shakespeare's Clown—Actor and Text in the Elizabethan Playhouse*. Cambridge: Cambridge UP, 1987.

河合祥一郎『ハムレットは太っていた！』東京：白水社，2001.

（すみざあす・りえ　外国語学部准教授）